



## 人形劇のルネサンス ドイツ語圏文化学

「天使と人形。かくしてようやく演劇が存在する。」

かつこいいけれどわかりにくいこの詩句は、20世紀ドイツ語圏の代表的詩人の一人、ライナー・マリア・リルケの『ドウイノ悲歌』(1923)からの引用です。荒廃した現実世界とは異なる「心」の舞台では、天使が人形を操るのであります。

『ドウイノ悲歌』に登場するこの人形劇のイメージは、ロマン派の作家ハイインリヒ・フォン・クライストなどの文学的伝統から解釈することもできます。一方で、20世紀の初めは、「人形劇のルネサンス」と呼ばれるような、新しい芸術人形劇が花開いた時代であることも見逃せません。機械化が進んで人間とは何かが問われ、仮面や人形に注目が集まった時代の潮流が、リルケの文学作品にも影響を与えていると考えられるのです。

写真は、ウィーンにあるオーストリア演劇博物館に展示されている、芸術人形劇の代表的人形使いの一人、リヒャルト・テシュナーの劇人形です。テシュナーは、旧ハプスブルク帝国領のボヘミア地方(今のチェコ)出身で、ウィーンで活躍しました。彼は優れた工芸家でもあり、その劇人形は、身体の各部位が動きやすいように工夫され、衣装や装身具に至るまで細かな細工が施されていて、とても魅的です。

四十年ほど前に書いた私の卒業論文のテーマは、リルケの初期の代表作『時禱集』でした。「人形劇のルネサンス」という文化現象を知つてリルケを読み直してみると、また新しい発見があります。ドイツ語圏文化学では、文学や語学のほか、音楽や絵画、舞踊、映画などの芸術分野も研究対象としており、ドイツ、オーストリア、スイスなどのドイツ語圏における文化現象について、領域横断的に学ぶことができます。

山口庸子 教授



オーストリア演劇博物館に展示されているリヒャルト・テシュナーの劇人形（筆者撮影）

## ドローンからの新たな視点 地理学

近年、ドローン（無人航空機）が様々な分野で活用されています。ドローンは、鳥の視点になって、地域の自然環境を見渡せます。ドローンを用いると、人工衛星や有人の飛行機からよりも鮮明に、また地上の視点からは困難な、地表を俯瞰する高精細な写真や映像を撮影できます。地理学の分野においても、ドローンを活用して地域の自然環境を分析し、さらにそれらを防災や環境保全に応用する研究が多数行われています。

私は「地すべり」(土砂災害)の研究をしています。日本では豪雨や地震などによって、毎年たくさん地すべりが発生しています。地すべりがどのような時に、どのような場所で、どのくらいの規模で発生するかを分析、予測することは重要な課題です。ドローンを用いると地表を俯瞰した写真だけでなく、写真測量という技術を用いて、地形や植物を高精細に測ることができます。つまり、従来は測ることが難しかった地すべりの地形や周辺の植物の状態を、高精細に計測・分析できるようになります。現在は地すべり発生後に継続的にドローンを飛ばし、地形や植物の変化を明らかにする研究を進めています。一過性になりやすい災害研究ですが、最新の技術を取り入れつつ、地域を俯瞰するデータを取り続けることに意義があると考えています。

齋藤 仁 准教授



ドローンから見た能登半島地震で発生した地すべり

## 台湾留学記 東洋史学

私は元々歴史が好きで特にアジア史に興味を持ち、東洋史を専攻した。台湾について多角的な学びを得るために10ヶ月間台湾大学に留学した。台湾は日本に統治された歴史があり、その影響は色濃く残っている。台北には総督府や台湾銀行本店、公会堂など当時の建物が数多く現存し、現在も使用されている。日本統治時代の日本語教育を受けた世代の方々は、非常に流暢な日本語で公学校（主に台湾人の生徒が通学）や小学校（主に日本人の生徒が通学）のエピソードをお話しされ、日本の童謡を歌っていた。統治の台湾への影響は両側面あり、単純な評価はできないが、中には今でも日本に対して劣等感情を持つ人がいることには大きなショックを受けた。主に日本人と台湾人で共同イベントを行う台日交流会の中には台湾を自虐的に語る人が実際にいて、台湾大学生の中で統治時代の「台湾帝国大学」の名称を敢えて用いる風潮にもそれが垣間見えた。当時の出来事や人々の感情は世代を超えて影響し続ける。歴史の流れの中に現在があることを実感した。台湾と中国の両岸関係や対日感情の問題は複雑だ。私は現在の日本人としてどう関わっていくべきなのだろうか。

私は小さい頃から歴史が好きだが、それは自分が確かに存在していると感じられるからかなと思う。史料を読み、話を聞くことで人々の生きた感触を確かめることができ、そうすることで自分もまた、連綿とつながる流れの中で今生きているのだとわかる。しかし、大学で行う「研究」は、高校の歴史学習の「知る」という受動的な活動を一步超えた主体的な行為だ。複雑な過去の一つに対して自ら切り込み新たな発見を求める。だからこそ、未来に繋がる立場を自覚し、より真摯な姿勢で取り組むことが必要だと思う。私は東洋史の知識も技能も未熟だが、卒論の際には歴史を研究する一人としてこの姿勢は忘れずに執筆したい。

森瑞稀 学部3年

十分（台湾）で行われた台日合同天燈上げ  
イベントにて

